ガーター器で たてスレッドができます

1．たて編みスレット

メリヤス編みの裏編み面全部、または任意の個処へたて糸で直線、斜めに好みの模様を織りこんだものを云います。

ガーター器を使用しますと、かんたんな部品をつけただけで、200目、150目、100目、50目と目数により使いわけて、たやすくたて編み模様ができます。

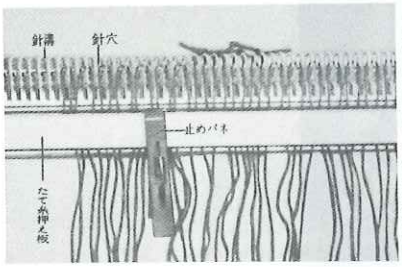
2．たて糸の長さ

直線、斜め、飛びたて編みと色々種類がありますので試し編みをした時たて糸の長さを計る様おすゝめします。たて糸は編み丈の約五倍必要です。

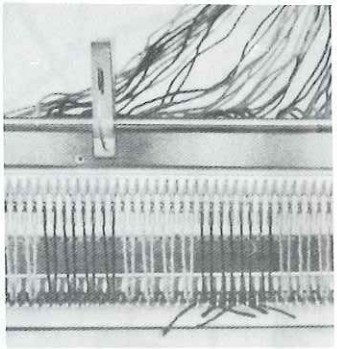
3．使　用　法

イ．まずたて糸をガーター板の針溝側に出る様針穴に通します。この場合ショールの様に140㎝のものを編む時は140㎝×5＝700㎝約7mの糸が必要になる為、ガーター板に通す糸が14mになり糸はしを合わせる事が大変です。その時は糸はし（7mと7m）をガーター板の針穴に通してから結びます。
※別売りの糸通しを使うと便利です。

糸通し



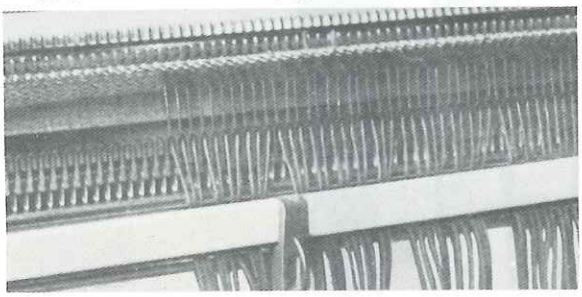
C図↓



A図↑　　B図↑

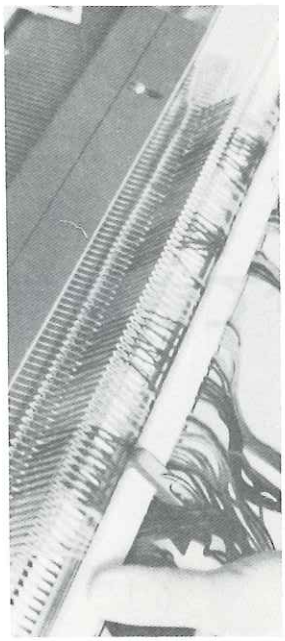
ロ．糸を通し終ったら、たて糸をガーター板と押え板ではさんで、止めバネ2ヶで左右をとめます。
（注）ガーター板がおもりになりますから、たて糸の本数が少い場合、左右の釣合がとれる様にして下さい。

ハ．編みはじめはたて編みをするところまでメリヤス編みをして、メリヤス針を全部手前まで出し、ストッパーで止め、編み地をガーター板に移し取ります（ガーター器説明書1図参照）次にたて糸を通したガーター板を立て針穴に通した糸のループがメリヤス針の下側になる様にして、ガーター板を上に引きます（B図）そのガーター板を編機本体の上に置き、ガーター板に移した編み地をメリヤス針にかけてから、たて糸を通したガーター板を編み地の前に下ろします（C図）

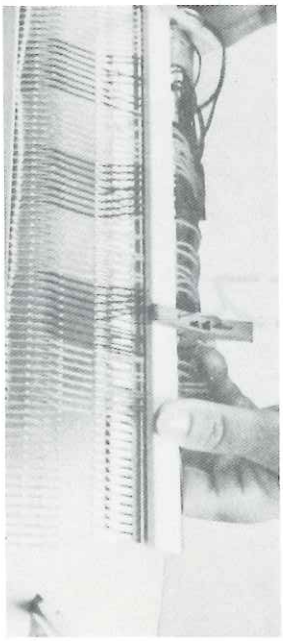


ニ．編みはじめの操作が終りましたら一段編みます。たて糸が下っているガーター板を両手で持って糸がたるまないよう、しかもメリヤス針に平行にして針の間を手前に軽く引きながら上げ（D図）右側或は左側の針に掛け（E図）ガーター板を放し地糸を編みます。（※メリヤス針のベラが開いてないと糸がかけにくい）

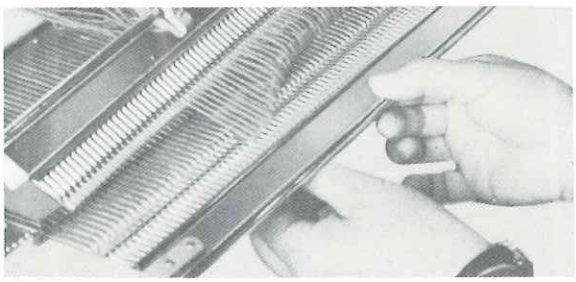
ホ．たて編みが終りましたらメリヤス針を手前に出し、ストッパーで止め、編み地を奥に押したて糸を通したガーター板を上げ、編機本体に置き、編み地を別のガーター板に移し取って（F図）メリヤス針よりはずし本体に置いたガーター板をうしろ側に下ろしてから編み地をメリヤス針に戻して一段編みます。糸はしはとなり同志で結びます。



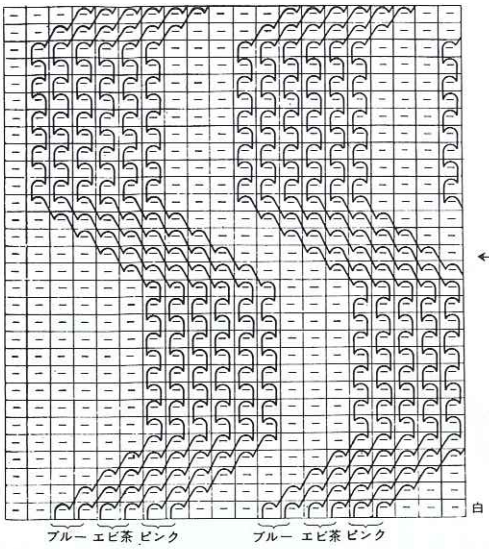
D図↑



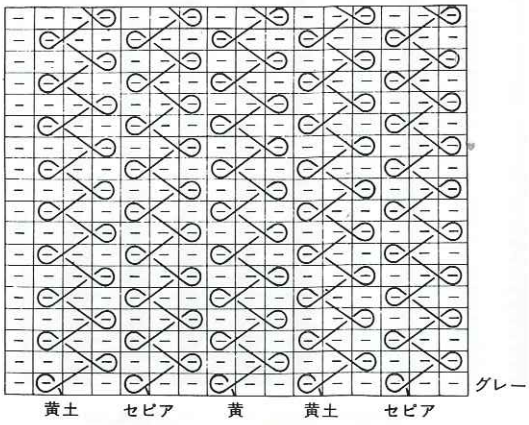
E図↑



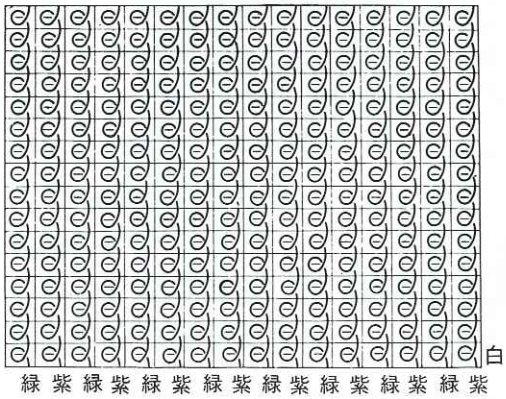
F図↑



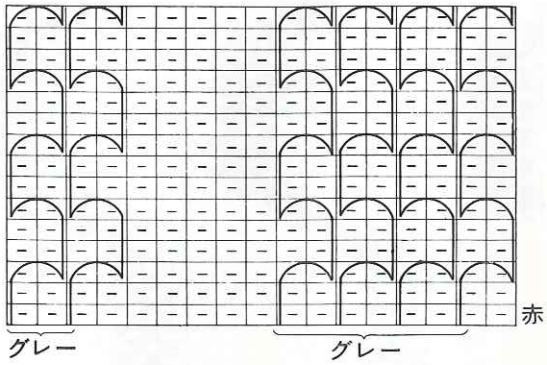
←No2



No8→

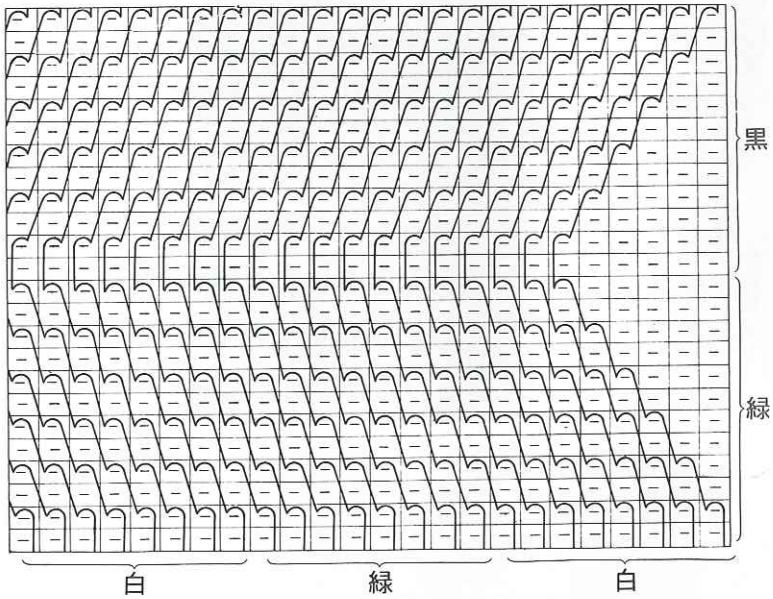


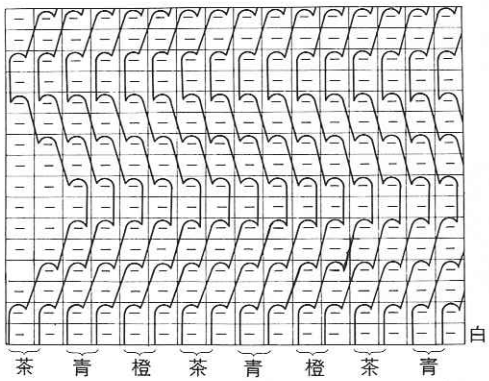
←No1



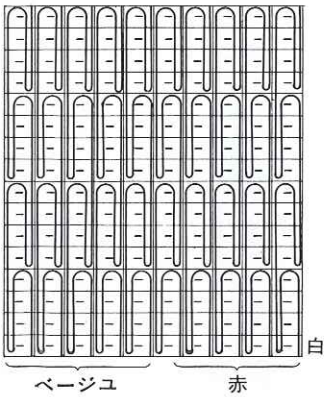
No4→

No6
↓



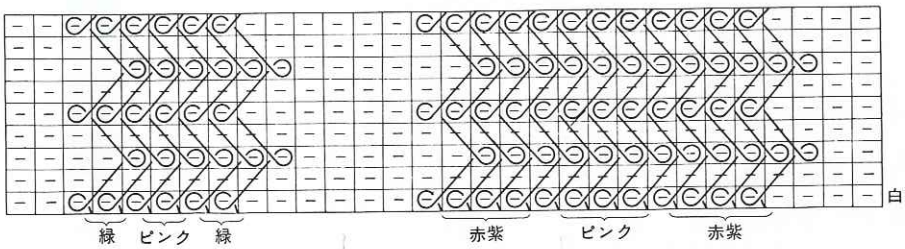


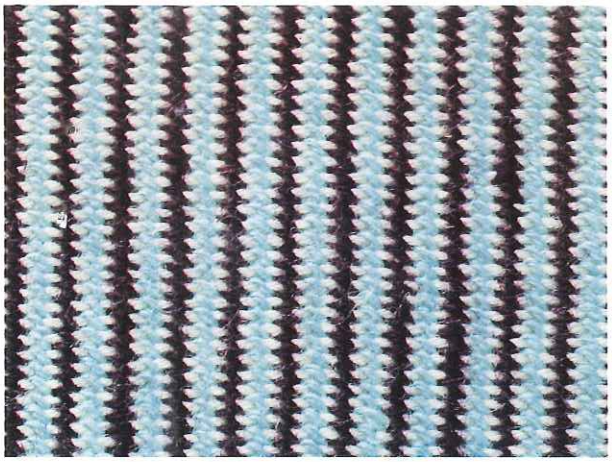
↑
No5



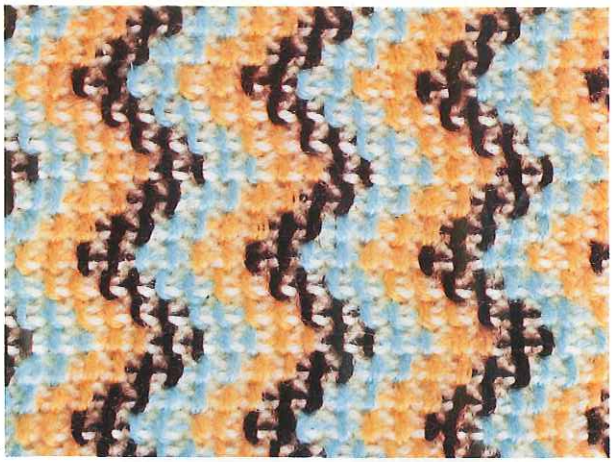
←No7

No3
↓

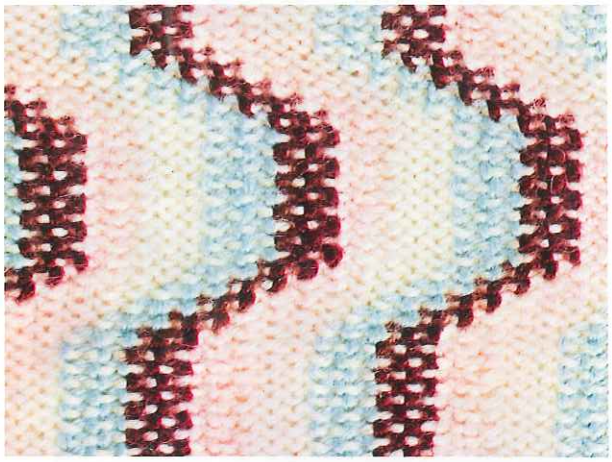




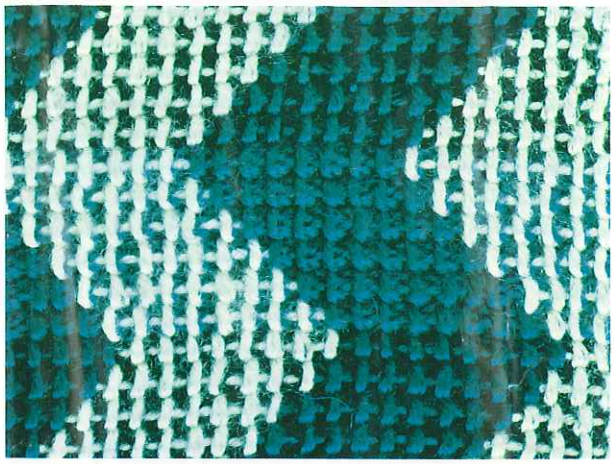
← No 1



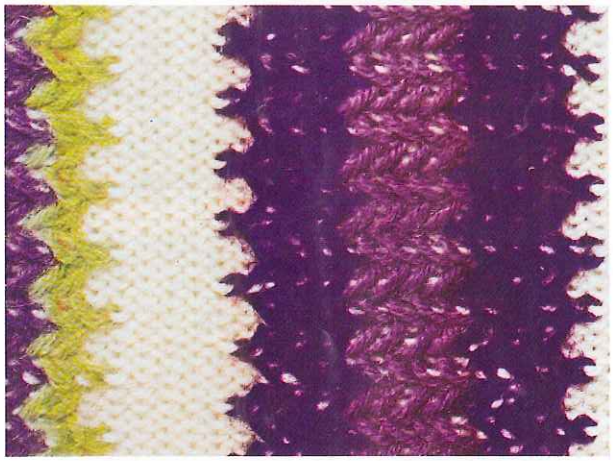
→ No 5



← No 2

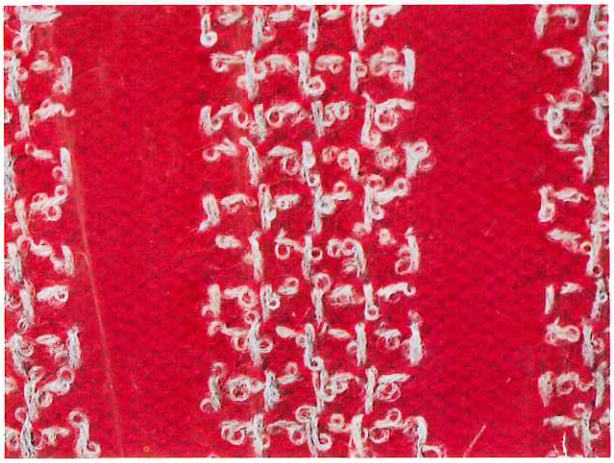


→ No 6



← No 3

→ No 7



← No 4

→ No 8

ガーター器説明書

皆さんのお手持の手編機が幾十倍も早いスピードで，ピコットなどの複雑な模様編ができたら，どんなに素晴しいことでしょう。この「ガーター器」は皆さんが日頃面倒だと思いながら編んでいた数々の模様編を一瞬のうちに解決する素晴しい器具です。

利　用　法

1，ガーター編が見る みるうちに編めていきます。

【理　由】日頃タッピーか，釣針で一目，一目裏目に直す操作を，この「ガーター器」で全目一度にできます。

2，ガーター編の操作が至極やさしく簡単なので，皆さんがまだ見たことのないような美しい模様編が沢山できます。

3，目移しが一度にできます。

(イ)寄せ目　例えばVネックの中央で，三目一度重ねた後の寄せ目などいろいろですが，この場合「寄せ目」など素晴しい速度で編目移動ができます。

(ロ)縮　目　袖口，その他の縮目(一段で幾目も同時に目を減らすとき等)の場合，竹針にはずしとらず簡単に重ね目ができます。

(ハ)穴明模様　例えば，ピコット編等の重ね目が一度に全部できます。

(ニ)地模様　例えば，縄編等幾模様でも一度にできます。

(ホ)この他　機械編では手数がかかり，編みたくなかった模様が簡単にできます。例えば，ピノチオ編(一目から幾目もつくり出す模様編)

4，編みかけの製品を途中で表が見たい場合（例えば編込模様）はずしとって簡単に検討できます。

5，作品を途中で休止し，持ち運びのとき便利です。

特　長

1，動針型，併行型，のいずれの型式の手編機にも使用できます。これはメリヤス針の間隔にしたがい各種を製造しています。

2，オモリがあっても一向に差支えありません。

3，この「ガーター器」は二つの連結板になっていますから，編目数の多い時以外は半分はずして使用できます

使　用　法

1，ガーター編の操作法

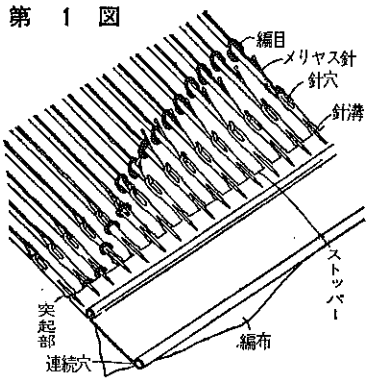
(イ)第一操作は第一図のように「ガーター器」の針溝を上向きにして針穴をメリヤス針に入れます。

(ロ)編目を「ガーター器」の方へ指先で軽く移します。この場合編目が突起部を越えてストッパーの点まで揃えて移すことがコツです，ただし編目が細かいレース糸などの時は，突起部を越さなくても結構です。

(ハ)メリヤス針のベラを越えて編目が完全に「ガーター器」に移されましたら，静かに「ガーター器」の針穴の先がメリヤス針のベラを開き終るまで前方へ軽く押してやります。

(ニ)メリヤス針のベラが完全に開きましたら「ガーター器」をメリヤス針よりはずします。

第　1　図



2，第　二　操　作

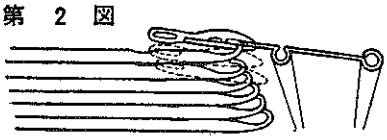
(イ)「ガーター器」を裏返します。

(ロ)次に（第二図及び第三図を参照下さい）この場合「ガーター器」の針溝をメリヤス針の頭の上にのせ「ガーター器」を手

前に少々引き（この時編目は全部メリヤス針の方へ移動しています）

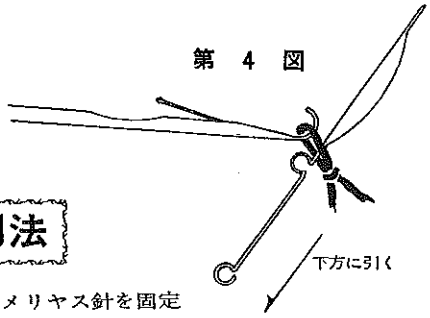
(ハ)つづいて「ガーター器」を立てるようにして下へ抜きとります。「ガーター器」の針穴がメリヤス針にひっかからぬように注意して下さい。一段編んでは以上の繰返しでガーター編が編めます。（第4図）なお「ガーター器」を外すときメリヤス針との間を引きはなすような気持で片方から下に引いて下さい。

第 2 図



第 3 図

第 4 図



ニードルストッパーの使用法

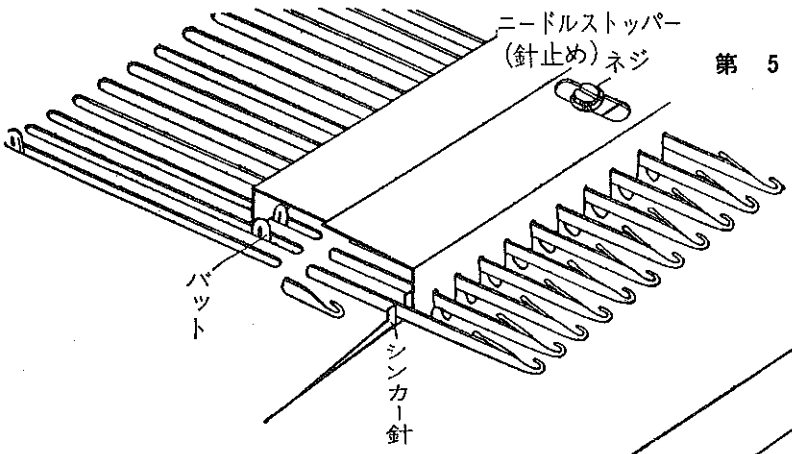
「ニードルストッパー」について，この器具は動針型のメリヤス針を固定させるもので「ガーター器」が更に使いやすくなります。尚編み始めや，ゴム編の目直しの場合等利用できます。

1，まずニードルストッパーのネジをゆるめます。

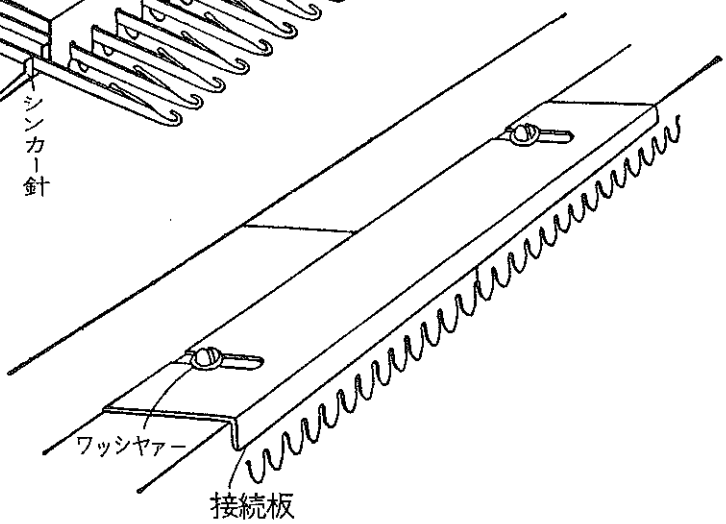
2，次にメリヤス針を前方に出し，メリヤス針のバットとシンカー針の上に「ニードルストッパー」をかぶせます。巾を調節しネジをしめます

3，「ニードルストッパー」を外すときの注意として，メリヤス針の方から平に上にもちあげて外して下さい。（第5図及び第6図を参照下さい）

第 5 図



第 6 図



編目移動の操作法

【引返し編】

引返しの時は糸が途中で終っていますから，そのままガーター器にとりますと糸が編地とガーター器の間に入ってしまいますから次の操作をして下さい。

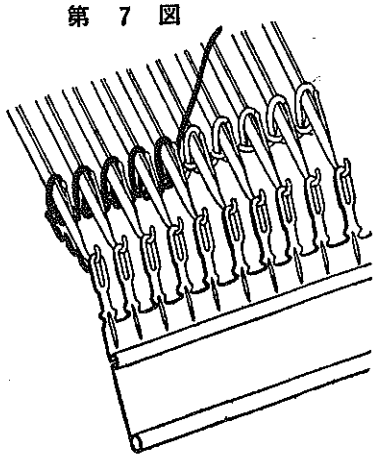
1，第一操作

第7図のように糸を上にもちあげてガーター器をかけ，全目をうつし取ります。

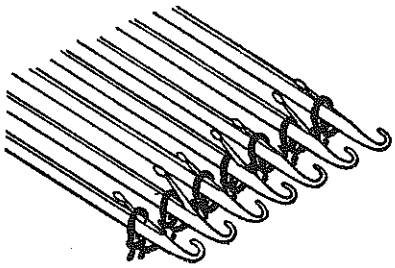
2，第二操作

ガーター器を裏返し，更に糸を手前に廻し編目をメリヤス針にかけます。第8図　（この方法を利用して一部をガーター編，一部をメリヤス編にすることもできます。）

第　7　図



第　10　図



【穴明模様】

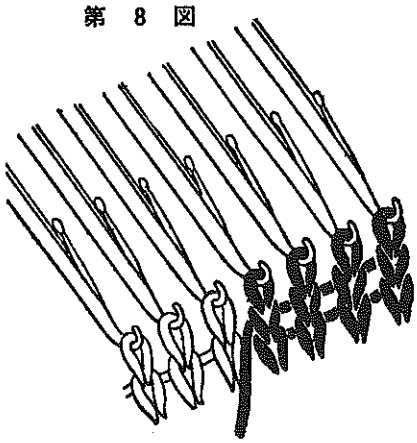
まず最初に，第9図の様に一目おきにメリヤス針を前方に出します。

つぎにのこったメリヤス針の編目がベラを越さない程度に前に出しメリヤス針の頭が同列になる様そろえます。(第10図)

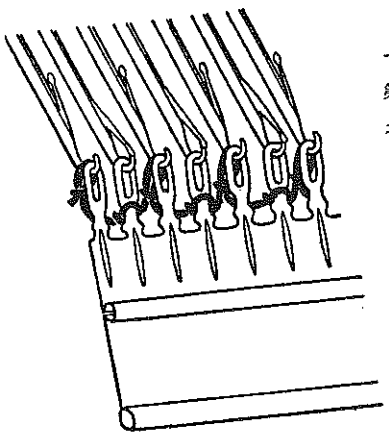
つゞいて全目にガーター器をかけメリヤス針の位置を一番前まで引き出します。

この時ニードルストッパーにて針を固定します。

第　8　図

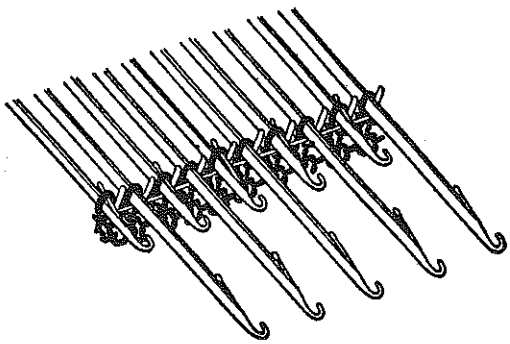


第　11　図



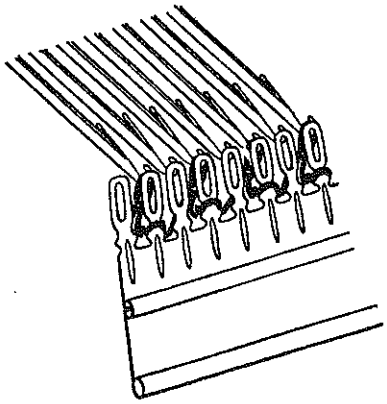
つぎに編地を手前に引きますと第11図のように一目おきにガーター器にうつしとれます。

第　9　図

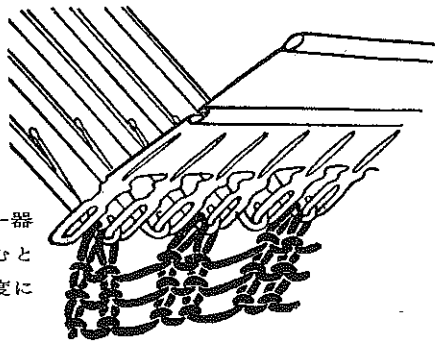


ベラを払ってガーター器を第12図のようにはずし、となりの目に移動します。

第 12 図

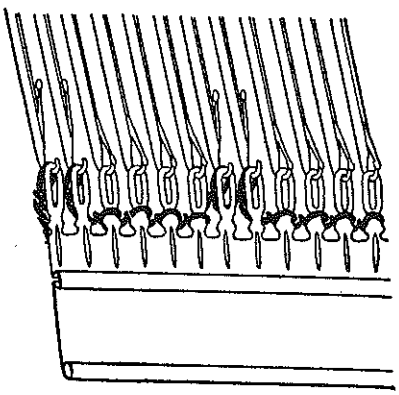


第 13 図



第13図のようにガーター器を立てて全目を送りこむとピコットの重ね目が一度にできます。

第 14 図



【縄　編】

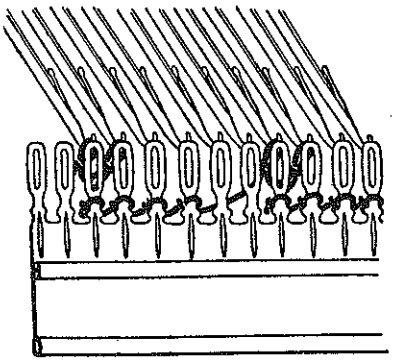
ピコット編の要領で交叉するメリヤス針の目をガーター器に移しとります。

（第14図）

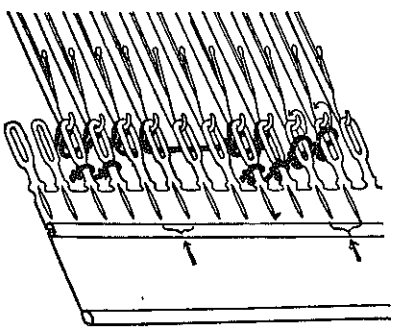
ガーター器を二目分移動します。

（第15図）

第 15 図



第 16 図

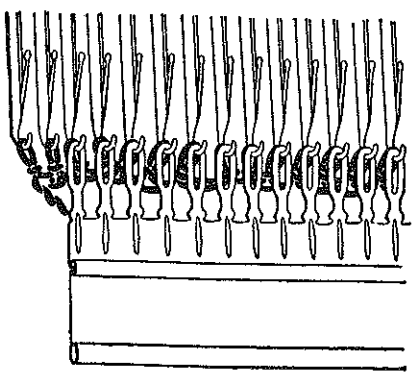


第16図のように指先でメリヤス針に二目もどします。

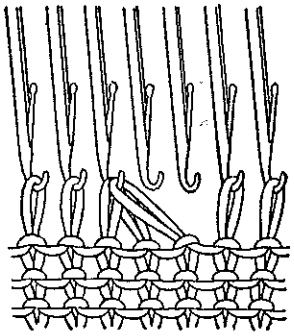
逆の方向に四目移動し残りの空針にガーター器の二目をもどしていきます。

（第17図）

第 17 図



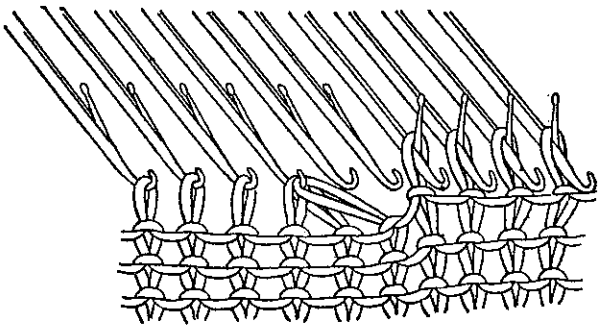
第 18 図



【寄せ目】

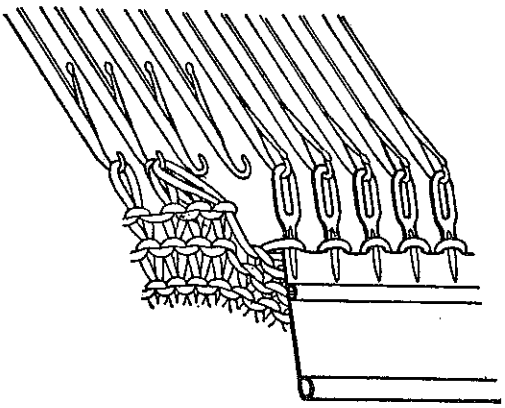
1.減目する目を三目の中心を一番奥にして重ねて左側に移します。
右側二目は空針になります。（第18図）

第 19 図



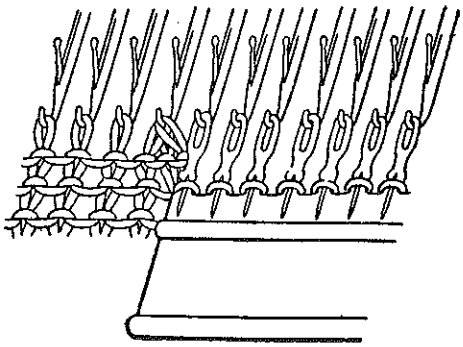
2.右側の目のかかっている針を手前に引き出しますと編目はベラの外側になります。（第19図）

第 20 図



3.ガーター器を針にかけて編目をガーター器に移します。
（第20図）

第 21 図



4.ガーター器を二目左に移動させ，メリヤス針にかけます。
静かにガーター器を立て編目をメリヤス針に送り込みます。
（第21図）

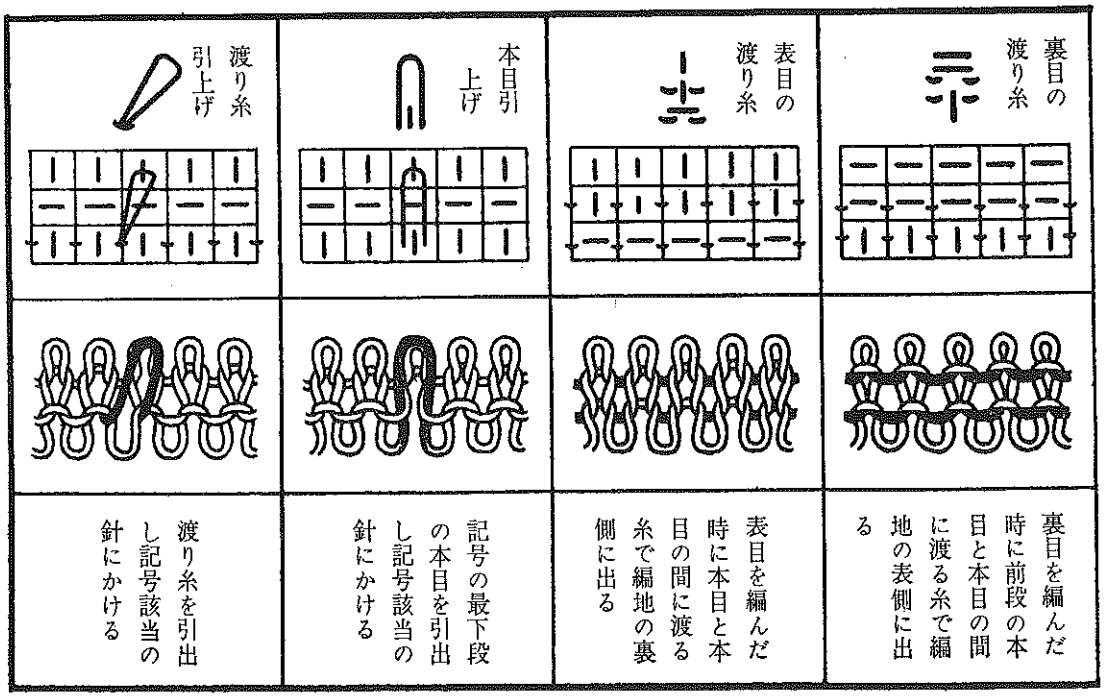
ガーター編記号について

従来の記号では編地の両面で操作している状態を書き表す事が困難でした、ガーター編は特に両面使用出来る事が特徴ですので模様の操作も両面でやる場合があります。それを表から見た(—)の平面に裏の操作も表したいと思い特にその点を工夫しました。
その為には一つの編目を本目と渡り糸に分解して表して見ました。

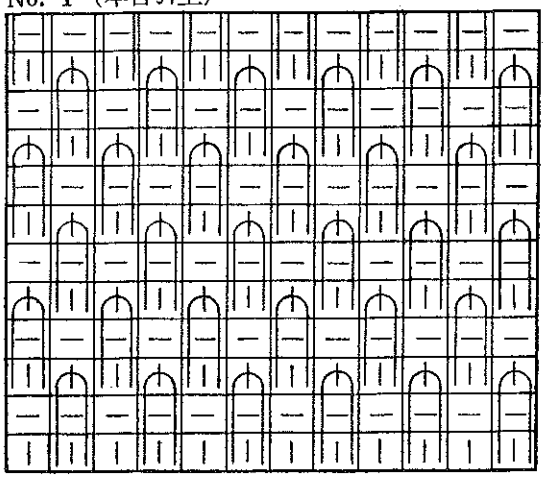
【本　目】 は編んだ時に直接針にかゝって出来るループ

【渡り糸】 は前段の本目の下を通って針と針との間に渡っている糸の事です

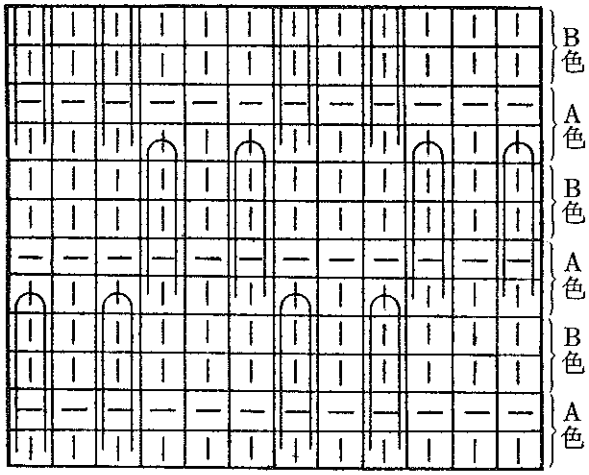
それが何故両面の操作を表す事になるかと云うと編地を表から見た場合には見えない本目や渡り糸がありますそれは表から引上げることは出来ません。
記号上では表で引上げられない目を引上げてある場合は裏で引上げると考えていたゞきたいのです（例外として引出引上があります)何故なら編地を裏返した時,今まで見えなかった位置の本目や渡り糸が引上げることの出来る状態になるからです。
渡り糸は裏目を編んだ時は編地の表に渡り表目を編んだ時は編地の裏に渡りどんな場合にも一段編むと必ず出来ますが特にそれを引上げる必要のない場合は省略して記号が複雑にならないようにしました。



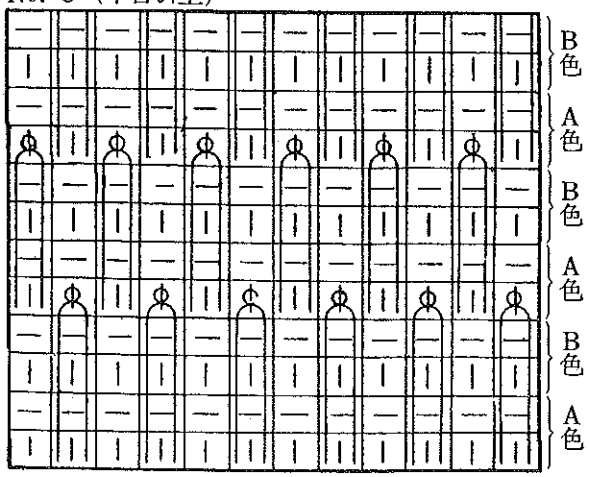
No. 1（本目引上）



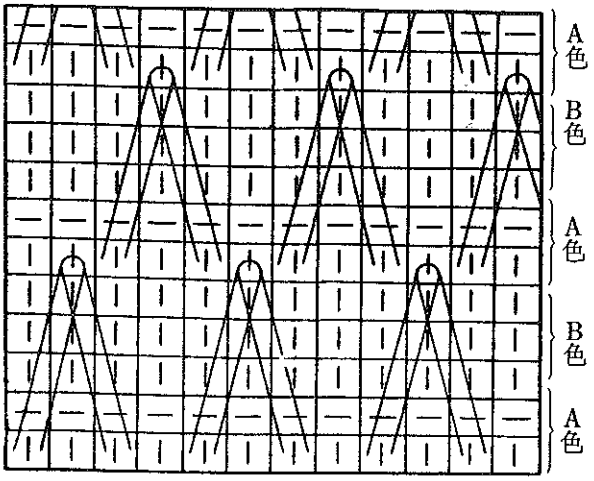
No. 2（本目引上）



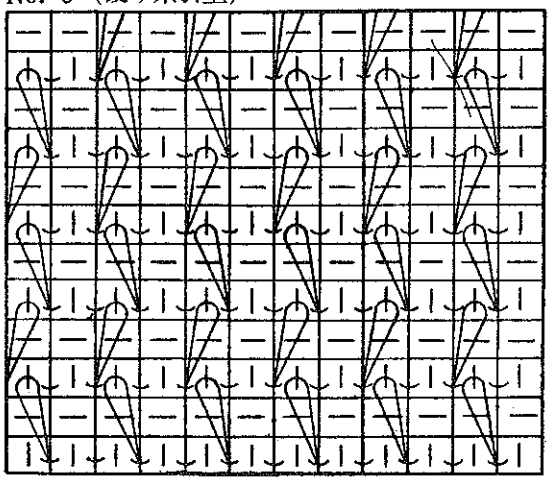
No. 3（本目引上）



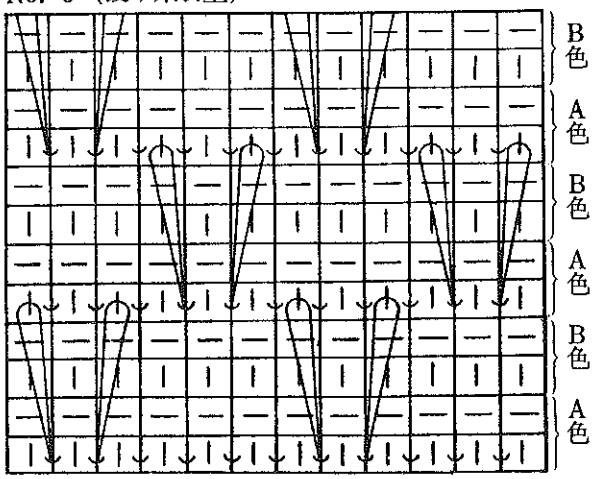
No. 4（本目引上）



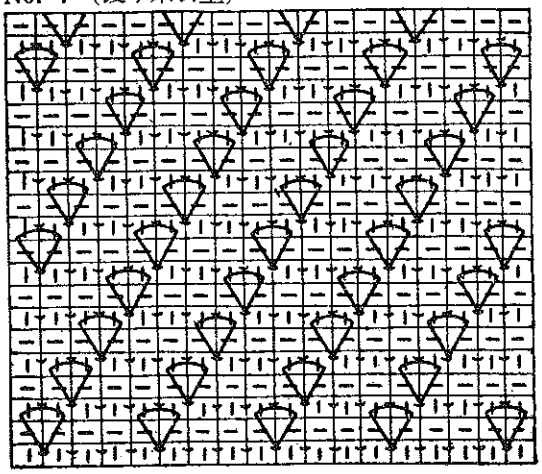
No. 5（渡り糸引上）



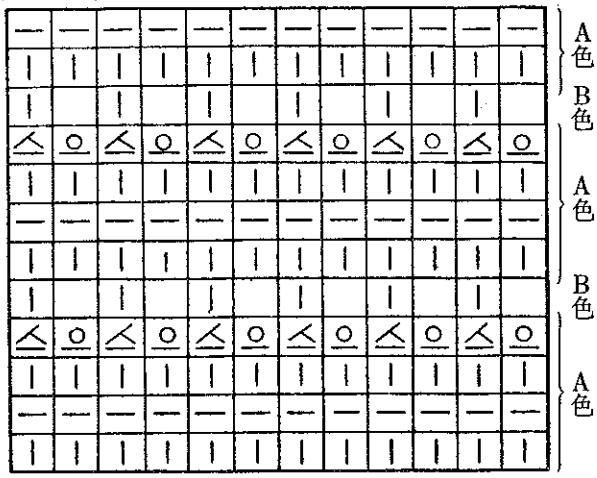
No. 6（渡り糸引上）



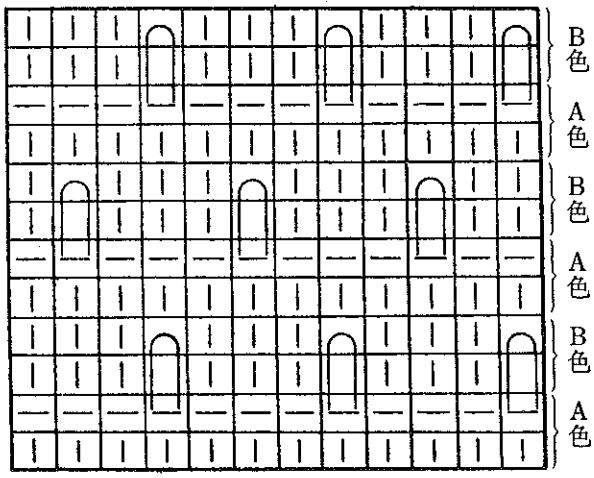
No. 7（渡り糸引上）



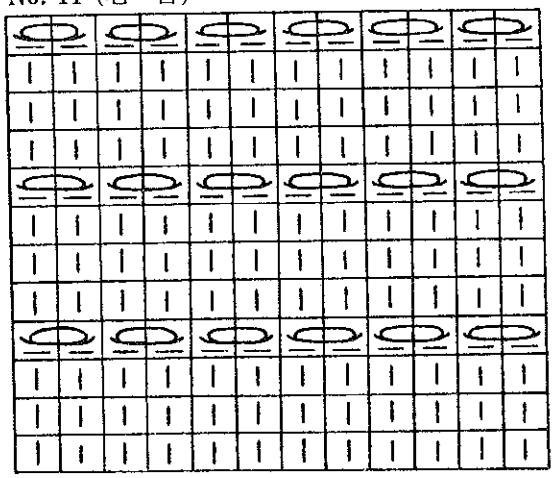
No. 10（レース）



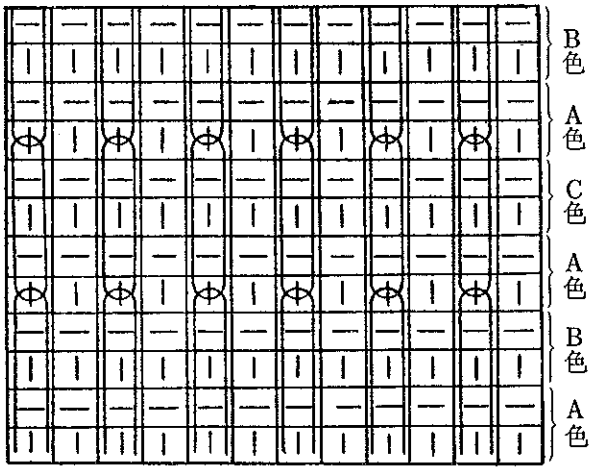
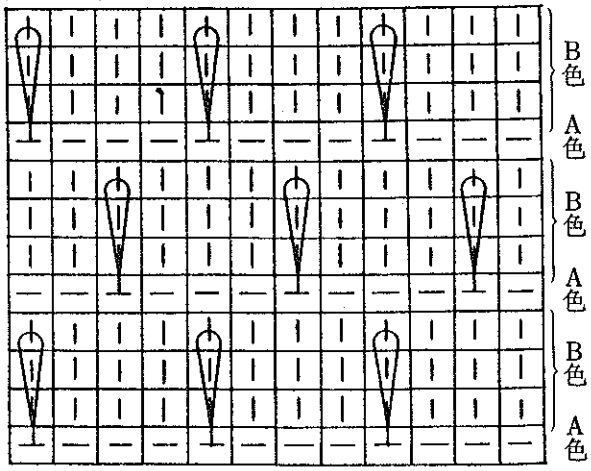
No. 8（普通引上）



No. 11（巻　目）



No. 9（すくい引上）



No. 12（抜出し引上）